

優秀賞

埼玉大学経済学部 斎藤ゼミB

『再発見！登別の魅力

～Take Photo in Noboribetsuプラン～』



わたしたちが登別に今必要なものとして考えたのは、全国有数の温泉地である市民としての意識を持つことと、登別の魅力を再発見するための仕組みづくりです。

これらを実現するため、わたしたちは『TPNプラン』という市民主体の写真コンテストを提案します。

なぜ写真コンテストなのかというと、現在ではデジタルカメラや携帯電話などが普及し、だれでも気軽に

参加できるイベントだと言えるからです。また、登別を被写体として写真を撮ることによって、市民が登別の魅力を再発見できると考えました。

写真コンテストは市民や観光客、市が参加運営にあたります。集まった写真は写真博物館やストリートギャラリーに展示し、また広報紙やホームページなどに掲載するという形で運営していきます。審査には市民も参加できるようにし、団塊の世代や学生を対象とした現像体験やモデル体験、写真講座などのイベント企画を立て、同時にコンテストをすることで市民の参加を促すことができます。

写真コンテストという取り組みやすい手段で、市民が主体となり観光客と交流することによって、そこから『写真のまち』という新しい文化が深化・定着へとつながっていくものと考えます。



登別市長賞

龍谷大学・同志社大学 富野・今川ゼミ

『登別改革論一人『財』育成、このままでいいの?』



わたしたちは、登別に必要なものとして、登別市のまちづくり基本条例を根付かせ、協働を柱としたまちづくりを推進していくことができるように、長期的な視点からの人『財』育成を図ることが必要

だと考えました。そのための手段として、『中学生まちづくり会議』を提案します。具体的には、中学生が市政への関心や疑問について調査した結果をまちづくり会議において報告します。

なぜ、まちづくり会議かかというと、登別市には、こ

の全国大学政策フォーラムを行っている実績があるからです。そして、若い世代が市政に疑問を持ち探求する学習機会の提供にもつながります。

中学生を対象としたのは、事前にわたしたちの大学でアンケート調査を行った結果、まちに対して疑問を持ち、問題を考えるようになった時期について、49%と約半数が中学生・高校生の時期と回答したからです。また、中学校は課外活動が活発だということがあります。まちづくり会議においても、課外活動になりますので、その土台があると言えます。さらには、市立の中学校であるため、登別市の創意工夫を反映させることができると考えました。

人『財』育成という観点以外での波及効果として、まちを見ることにより郷土愛の育成が図られます。

つまり、故郷登別市を出て行っても、登別は良いまちだということが全国へPRされ、口コミによる市への集客が期待できます。そしてまちづくり会議を行うことで、世代間や地域間などのさまざまな交流の促進が図られると考えます。

登別市議会議員賞

立教大学コミュニティ福祉学部 原田ゼミ

『のぼたま大作戦!! ワン・ツー・スリー ダア!!』



わたしたちは、近年、深刻に進む高齢化社会の中で、高齢者を支える地域住民と高齢者自身とが、いかに生きがいを作れるような場所を整えるかが必要だと考えました。

現在、登別でもさまざまな取り組みが行われていますが、もっと枠にとられない基盤が今後求められていくと感じました。バラバラだった市民のニーズに対応する機関を一元化して行うことで、高齢者地域住民の積極的な社会参加を促す仕組みにします。

それが、登別たまり場事業、通称『のぼたま事業』です。この『のぼたま事業』は3つあります。

一つ目はニーズの把握です。どこに相談していいのか分からなくて顕在していたニーズをカテゴリーや制度の枠をなくすことによって、声を取り込みやすくします。例えば市内にある公民館や空き店舗などを利用して、たまり場というものを作ります。

二つ目は人材発掘です。ボランティアをしたい、何か自分の特技を活かしたい、能力を社会のために活かしたい市民を行動に移しやすくします。シルバー人材センターやボランティアセンターなどの機能をここで一つにまとめます。

三つ目は事業化支援です。個人単位やグループ単位で行っている市民活動を、さらに積極的な取り組みをする団体になることを支援したいと思います。

この『のぼたま事業』を行うことにより、市民満足度の向上やまちの活性化、雇用などの効果や、高齢者にとっても生きがいやコミュニケーションづくりなどのさまざまな効果が生まれると考えます。